

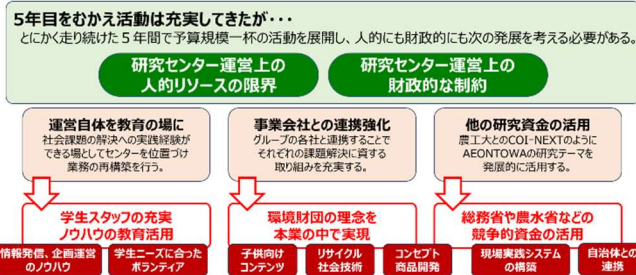
AEONTOWAリサーチセンター + イオングループと早稲田大学の連携による
環境を通じた地域づくりのための実証研究基盤の構築

題目 地域資源の活用と生物多様性保全による価値創出

著者 早稲田大学 永井祐二 岡田久典 中野健太郎 李洸昊

1. 概要

AEONTOWAリサーチセンターの2025年度の活動報告と共に、イオン環境財団寄附講座の学生活動について報告する。連携プログラムも6年目を迎え、里山・森づくり、地域・生活圏づくり、人づくりの統合プロジェクトが形作られてきた。特に、自然共生社会・循環型社会・脱炭素社会をベースに、里山の価値を再発見し、新たに現代的な価値として創出することを目指した研究活動を行い、統合的研究と教育プロジェクトの融和を重視した実証研究基盤の構築を行っている。しかし、設立5年間の活動拡大は限界を迎え、今後は質的向上をめざすと共に、新たな財政基盤の確立が課題となっている。



図表1：基盤の確立に向けた体制改革

2. 実施内容

上記の課題を受け、例年行われてきたイオン環境財団寄附講座や地域の先進事例づくりに関しても、新たな価値創出に繋がる取り組みに重点を置いている。

① 寄附講座等における里山の価値に関する教育・研究

寄附講座および関連GEC講座では、里山理解に繋がる講義と、イオンの現場で取り組まれている新しい社会づくりの試みが語られた。また、寄附講座では現地のフィールドワークを実施し、若い世代にとっての里山の価値とは何かを議論する場を設けた。

<フィールドワーク実施内容>

1. 滋賀県甲賀市・琵琶湖

財団育樹活動に参加し、水源となる山林から琵琶湖流域、琵琶湖にかけて里山里海の文化と琵琶湖システムを学ぶ視察をおこなった。

2. 石川県能登地方

イオングループと合同での震災・豪雨災害復興ボランティアを実施し、当地域において里山地域における震災時のレジリエンスを対話によって学んだ。

3. 山形県小国町

地域の資源を活かした小ビジネスを視察し、地域の森林資源や地域の自然観光資源などを活用した新しいビジネスモデル構築に挑んだ（総務省予算枠を活用した展開）。

4. 宮崎県綾町

貴重な照葉樹林を守る活動の一環で行われるイオンの森づくりの現場を視察し、里山と生物対応性の保全、広葉樹の活用などの取り組みを視察した。

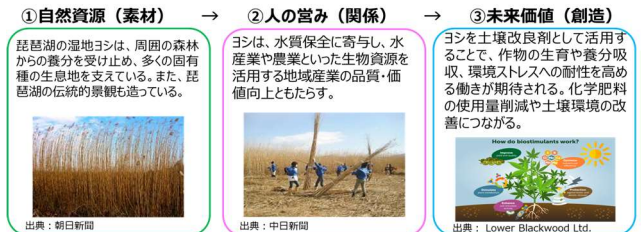
5. 長崎県南島原市

かつては地域資源を活かし、発展をした島原半島の豊かさ、文化の奥深さを学んだ。現地では里山づくりに参加し、これと関連して地域で取り組まれる有機農業の取り組みについても学んだ。



図表2：地域の価値を考えるフィールドワーク

フィールドワークの知見は、学生が課題としてとりまとめた。以下に例を示すように、自然資源が人の営みによって価値交換され、現代的な新しい価値を創出することを分析した。



図表3：価値交換のワークショップ資料より

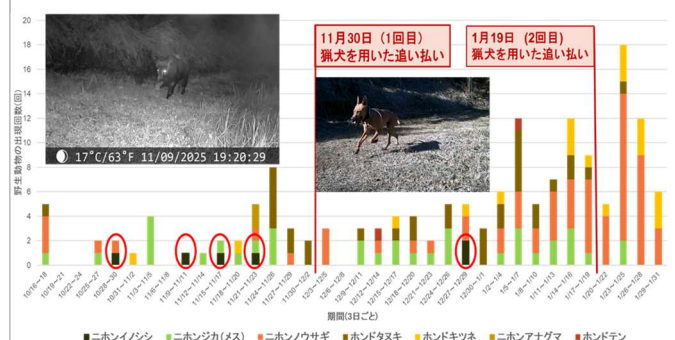
② イオンの里山における生物多様性の研究

綾町イオンの森では里山再生の取り組みの中で、生物多様性の回復の課題がある。かつての針葉樹を切り開いて、遊歩道などを造成したが、そこに在来樹種を植えた以外は特に希少種などの保護活動はしていない。そこで、地形の高低、水脈等を活かして水辺を作ることで、より明確に動植物を育む場となることが期待される。現地のBRセンターと協働して、ビオトープづくり、バグハウスづくりに取り組み、生物多様性の回復を観察するための環境整備を行った。作業には生物同好会も参加し、継続的な取り組みに繋がっている。



図表4：新設されたビオトープ

また、関連しての獣害対策調査を行い、修士学生の研究対象となっている。綾町では里山の環境整備の食害の防止策として防護ネットを設置している。しかし、野生動物が防護ネットを破って侵入し、食害が起きている現状があり、その対策として猟犬を使った追い払いによる効果の評価を行っている。



図表5：センサーカメラ設置と個体数調査

これらの取り組みを通じ、生物多様性に配慮した獣害対策のあり方を検証し、同時に、調査コンテンツを環境教育に活用するなどの取り組みも行っていく。

3. 総括

本研究は、「イオンの里山」というものを定義し、実践することを主眼としており、カーボンニュートラル、サーキュラーエコノミー、ネイチャーポジティブの3つの政策的統合的なアプローチの視点から里山を捉えている。特にネイチャーポジティブを中核に捉えているのが、研究の特徴であり、地域における具体的な事例における政策間の良好な関係を見だし、これを通じて持続可能な地域づくりをめざす。